

# 私を支えたことば「不運を不幸にしてはいけない」

●作家  
津島佑子  
(ししま・ゆうこ)

## も

う、十八年前のことになる。私の息子が思いがけなく突然、この世を去り、私はただ茫然と、そのころはまだ元気がだった母のもとに身を寄せて日々を過ごしていた。

私が子どもたちと住んでいたマンションでは息子の棺をエレベーターに乗せられず、六階までの階段を登るしかないと言われ、棺に入ってまでそんな乱暴な扱いを受けさせるのが耐えられず、一軒家に住む母に頼んで、葬儀を母の家でとりおこなわせてもらうことにした。それで息子の骨も母の家に置いたままだったし、ちょうど中学生になったばかりの娘も春休みに入っていたので、急いでマンションに戻る必要もなかった。

そうは言っても、やはり私は母に甘えるだけ甘えて、日々を無為に過ごしてはいたのだった。息子のいなくなった時間をどう認

めればいいのか、まったく考えることができなくなっていたし、そもそも、その事実を受け入れることもできずにいた。すべては悪い冗談だと思えなかった。それでも現実的な義務はいやでも襲ってくる。香典返し、納骨をどうするか、息子の通っていた小学校への挨拶などなど、今考えれば、ほんやりしつづけている私に母がいつも付き添ってくれたおかげで、なんとか、一応の義務は果たせたようなものだった。

そのころ、私はどのような毎日を送っていたのだろう。息子のための花を絶やさないように、新しい花を買い求め、水を取り替え、枯れはじめた花を摘み取っていた。果物も同様にいつも新鮮なものを置いてやった。ほかにどんなことをしていたのか、わかからない。仕事もできなくなっていたし、本も読めなくなっていた。外出もできない。体を洗うということもできない。なにかが起るのを、つまり息子が戻ってくるのを待ちつづけていたとしか言いようがない。

そのうち、娘の春休みの終わりが近づき、いやでもなんでもマシヨンに戻らなければならぬとさすがに私も気がついて、母にそのように告げた。母はやっと私もその気になったかというようにうなずき、私に「忠告」したのだった。それまでも当然、母としては娘の私に言いたいことはたくさんあったのだろう。でも、

口を閉ざしつづけていた。

「いくら不運なことがあっても、それを不幸にしたらだめですよ。ほんやりしていて、どんな不幸を招き寄せるか、今のあなたを見ていると、それがなによりも心配です。」

このように母に言われ、一瞬、その意味がよく理解できなかった。それまでの私には不運と不幸は重なり合ったものでしかなかったのだ。不運とは人の意志でどうなるものではないこと、そして、不幸とはその人自身が招き寄せるもの、とたぶん、自分自身の人生から母は考え、そのように自分に言い聞かせて生きてきたのだろう。母も多くの家族の死を経験しつづけている。

そう思い当たったら、私ははじめて、自分の甘えが恥ずかしくなり背中が急に伸びたような気がした。どんななぐさめの言葉よりも、その母の言葉は息子を失った私に、一人の人間としてこれからも生きつづける義務と責任があることを明瞭に思い出せてくれたのだ。孫を失った母としてもそのとき、一生に一度だけ、ひそかな自分の思いを、同じ悲しみのうちに語らずにいられたのか。その母もすでに六年前、この世を去った。



● 津島佑子（作家）

1947年 東京生まれ。

作品に、『光の領分』（講談社文芸文庫）、『笑いオオカミ』（新潮社）、『火の山―山猿記』（講談社）、『快樂の本棚』（中央公論新社）などがある。

三省堂版新課程学習指導要領教科書『新編現代文』には、「忘れられない場面」（小説のなかの風景）中央公論社 所収）が採録されている。